

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	佐々木 雅明
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 How Did Leo Kanner Distinguish Early Infantile Autism from Childhood Schizophrenia?（レオ・カナーはどのようにして小児期の統合失調症から早期幼児自閉症を区別したのか?）
	掲載誌 History of Psychiatry（in press）
	主査 清水 直樹
	副査 幸田 和久
	副査 橋口 さおり
〔論文の要旨・価値〕【背景・目的】近年、自閉症の有病率上昇が報告される一方で、その診断基準に対する批判や見直しの動きが活発化している。しかし、自閉症が他の精神障害とどのように区別され、独立した概念として成立してきたのかについては、十分な歴史的検証が行われてこなかった。本研究では、自閉症概念の起源となったレオ・カナーの早期幼児自閉症に着目し、カナーがいかに小児期の精神病と自閉症を峻別しようとしたのか、その歴史的過程を分析的に記述することを目的としている。 【方法】カナー自身の論文および教科書記載を中心に、早期幼児自閉症の概念形成に影響を与えたと考えられる、カナーが引用した文献を網羅的に調査した。対象文献は 1890 年代にまで遡り、150 件に及ぶ文献を国会図書館等を含めて精緻に検討した。【結果】1943 年、カナーは 11 例の自験例を報告し、他者との「情緒的接触の障害」という精神病理を中心的特徴として捉えた。また「生来性か後天性か」「進行性の経過をたどるか否か」の 2 点を重視することで、小児期の統合失調症との鑑別が可能であると論じた。しかし、当時の米国では統合失調症の概念が拡大していたため、カナーの主張は反論を受け、結果として自閉症を「潜行発症で非進行性の経過をたどる統合失調症の一群」として位置づけ直す段階を経ていた。【考察】精神医学界におけるハイデルベルク学派は、精神障害を「疾患的でないもの」と「疾患的なもの」に分類したとされる。カナーは、自閉症を前者に、統合失調症を後者に位置づけ、自閉症を精神病とは異なる発達的問題として理解しようとしていたと推察される。近年、自閉症を神経多様性のひとつのあり方として理解しようとする潮流があるが、カナーが早い段階から自閉症を精神病から切り離そうとした姿勢は、今日的議論との一定の整合性を持つ点で注目される。 【結論と研究の意義】本研究は、早期幼児自閉症と統合失調症の疾病分類学的関係に関する、カナーの見解の変遷を通時的に追跡し、その背景にある統合失調症概念の歴史的変容を踏まえて再解釈したものである。同一診断名であっても、横断的症状を重視するか、縦断的経過を重視するかによって、概念が大きく揺れ動くことが示唆された。カナーが提示した縦断的経過に基づく 2 つの鑑別視点は、今後の精神科疾病分類学における議論にとっても有用な視座となるものであり、重要な再発見である。	
〔審査概要〕審査は主査、副査および 2 名の陪席のもと行われた。PC によるプレゼンテーションののちに、質疑応答が行われた。審査のなかでは 1) 自閉症の疫学 2) 自閉症診断基準の問題点 3) 小児期の統合失調症の病像 4) 早期幼児自閉症の出生直後からの症状 5) 臨床への還元・今後の研究展望など、多岐にわたる質問がだされ、申請者は概ね的確に回答した。	
最終試験結果の要旨	
〔研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価〕大変わかりやすく、練られた発表であった。申請者は本研究に関する幅広い知識を有しており、質疑応答も専門領域だけでなく周辺領域についても的確に応答し、十分な発表能力があると判断した。発表・質疑応答を通じて真摯な態度に終始し、誠実で礼儀正しく、学位授与に値する人物であると判断した。英語は申請者が引用文献に用いた文献についてその場で箇所を指定し、訳してもらうことで評価し、十分な語学力を有すると判断した。	